

アートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」選出企画



中屋敷智生 × 光島貴之 〈みるものたち〉

2025.6.4（水）— 6.29（日）

ごあいさつ

2025年6月4日(水)より、株式会社リクルートホールディングスが運営するBUGにて展覧会「中屋敷智生×光島貴之〈みるものたち〉」を開催いたします。本展覧会は2024年にBUGがおこなったアートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」にて選出され企画であり、BUGスタッフのサポートを受けながら約1年をかけて準備を重ねてきたものです。

本展覧会では、独自の仕方世界をみる二人のアーティストに焦点を当てます。色弱の中屋敷智生は多くの人とは異なる色の世界で絵を描き、全盲の光島貴之は光のない世界でレリーフを制作します。中屋敷は「みるもの／みられるもの」の関係に注目し、両者が一体となるような鑑賞体験を得られる絵画を目指してきました。色を明暗で見る彼独自の色彩は、マスキングテープが重ねられたレイヤーと相俟って私たちの焦点を揺さぶります。また、光島は「みえるもの／みえないもの」の間をつなぐものとしてアートを考え、制作にとどまらず対話型鑑賞の活動にも長年積極的に関わってきました。彼が視覚以外の感覚で捉える街の姿は、釘の高低差や手ざわりに特徴のある素材を使うことで象徴的に表現されます。この二人の対照的なアプローチは、簡単には一括りにできない私たちの〈みる〉という感覚をあらためて考える時間をもたらすでしょう。中屋敷と光島、そして鑑賞者を加えた〈みるものたち〉のあり方を見つめ直す機会となれば幸いです。

本展覧会の開催にあたっては多くの方々のご尽力を賜りました。出展をご快諾いただいたアーティスト、企画の準備に伴走してくださったBUGキュレーター檜山真有氏をはじめスタッフの皆様、すべての関係者の皆様にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

企画者 高内洋子



写真撮影OK



映像撮影OK



お手触れOK



防犯カメラ作動中

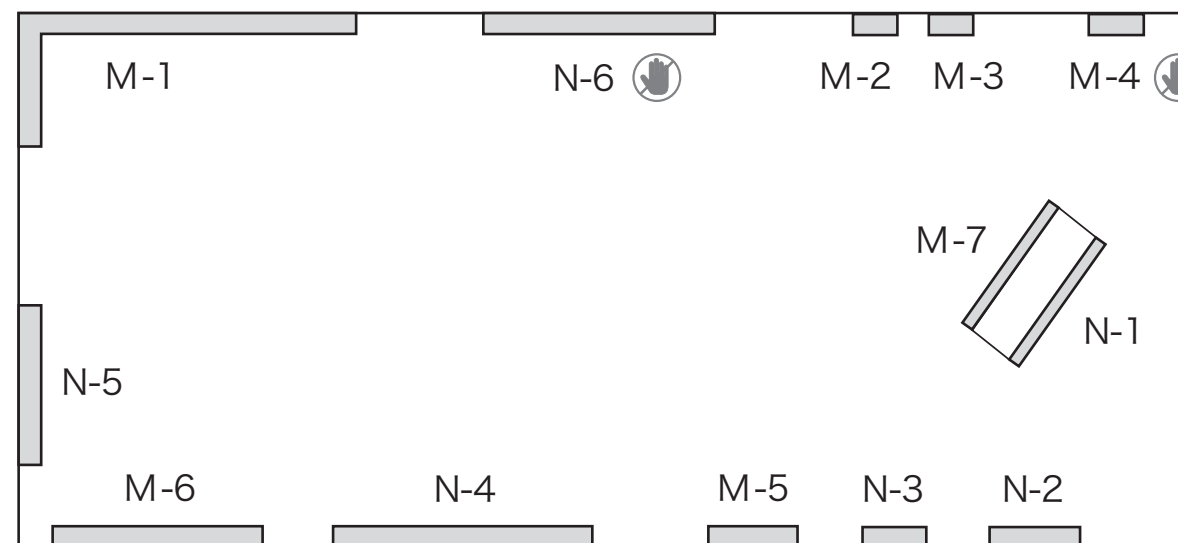
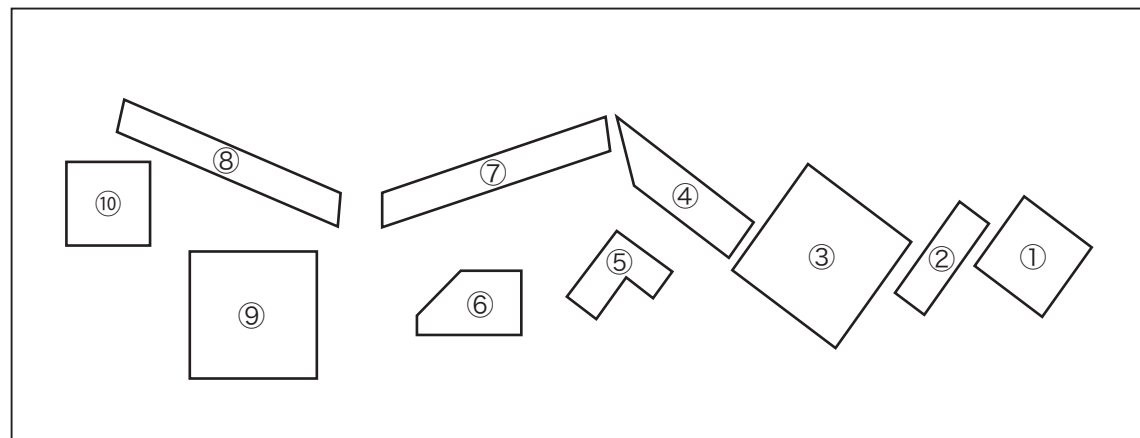
作品リスト 各作品について、作品タイトル／制作年／素材・作品形式/サイズ (mm) を記した。

光島貴之

M-1
京都まち歩き ― 学生時代の左京区
2025
ミクストメディア

①アトリエ付近 590×600×90 ②市バス 200×800×80 ③北大路駅バスターミナル 910×910×170 ④たのしいエスカレーター 300×1200×60 ⑤いまここに 500×590×100

⑥詩仙堂のししおどし 610×780×145 ⑦疏水沿いの道(1) 1790×153×70 ⑧疏水沿いの道(2) 1790×153×80 ⑨無鄰菴の庭 910×910×140 ⑩ウッドノートでアイリッシュ 605×600×90



M-2
新しい点字ブロック
(この先 居酒屋あり)
2019
300×300×80
釘、フェルト、パイン集成材

M-5
光と風になる
2025
803×652
ラインテープ、
カッティングシート、
キャンパス

M-3
新しい点字ブロック
(ここから速く歩く)
2019
300×300×80
釘、タイルシート、EVAシート、
パイン集成材

M-6
色と触覚に翻弄されて
2024
155×1820×60
釘、鋸、ゴム板、
カッティングシート、OSB合板

M-4
缶コーヒーを飲む 
1996
400×315
ラインテープ、紙

M-7
ハッピーエンド
(左上) しあわせわ あまい
(右上) だけの ちょこれーと
(左下) だと おもってたけど
(右下) いま それわ そこに
2025
左上: 910×905×50
右上、左下、右下: 915×910×55
ミクストメディア

中屋敷智生

N-1
はっぴいえんど
2025
1940×1940
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

N-2
空の青をビニール袋に詰め込んだ夜、
部屋の灯りを消してそっと覗いてみたんだ
2025
805×655
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

N-3
沈殿
2025
610×458
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

N-4
触れるものは、触れられる
2023
1940×2610
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

N-5
There is
2024
2610×1940
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

N-6
Un/Known 
2025
3240×1940
油彩、アクリル、
ソリッドマーカー、
テープ、キャンパス

☆
世界を捉えることと
描くことのあいだ:
中屋敷智生×光島貴之
アーティストドキュメンタリー
2025
12分

アーティストからのメッセージ

わたしたちは絵を「見る」と言いますが、それは単に絵画という“モノ”を認識するだけでなく、その“モノ”を通して“コト”、すなわち体験や出来事を経験しているのです。わたしがいて絵画があり、絵画があってわたしがいる。この関係性の中で、わたしたちは絵を見るという行為を成立させています。

「A is B」や「AはBである」と言うとき、わたしたちはしばしばAやBという“モノ”そのものに意識を向けがちです。たとえば「This is a pen」と言うとき、「このペン」とは何か、「書くモノ」とは何かといった属性や意味、つまり「見えている」「見えていない」といった表層的な特徴に目を奪われやすいのです。

しかし、本当に重要なのは、AとBを結びつけている「is」というbe動詞、すなわち「つながり」そのものにこそリアリティがあるのではないのでしょうか。この「is」こそが「まなざし」であり、わたしたちがこのBUGという場でおこなう経験なのです。

つまり、「見えている」「見えていない」「何色に見えている」「どう見えている」と考え始めた瞬間、わたしたちはすでに「まなざし」そのものから離れてしまっています。もちろん、物理的に見える人、見えない人、色を感じる人、感じない人がいますし、たとえ見えていても全員が同じように色や形を感じることはできません。しかし、そこで「みんな違うよね」「相対的だよね」とまとめてしまえば、そこで思考は止まってしまいます。

この場であなたが何らかの方法で経験している「まなざし」こそがリアルなのです。そして、このBUGという場での経験は、それぞれがそれぞれの仕方で感じ、またその「まなざし」から外れた後に他者と共有し、中屋敷や光島、またあなた自身の「まなざし」について考え合うこと、それこそが美しいことだとわたしは思います。

ですので、本展では、まず本展について考察する前に、ぜひあなた自身の「まなざし」に没入していただければ幸いです。

中屋敷智生／Tomonari NAKAYASHIKI

1977 年大阪府生まれ、京都市在住。
2000 年京都精華大学美術学部造形学科洋画分野卒業。2007 年とよた美術展'07(豊田市美術館、愛知) 審査委員賞。国内を中心に、韓国、台湾、イギリス、フランスなどのグループ展やアートフェアに参加多数。近年では絵具と同様のメディウムとしてマスキングテープを使用し、独特のコラージュ的なレイヤーとテクスチャーのある絵画作品を手がける。

出展アーティストのドキュメンタリーは
こちらからもご覧いただけます



「みるものたち」というテーマで出品の依頼を受けた。10歳頃で全盲となったぼくが、このタイトルで出品するのはなぜ?と思われる方も多いかもしれない。ぼくが見ている見えない世界を、見える形で作品にしていくなというのが、今回与えられた仕事だと思って取り組んだ。触覚や、音空間による見え方を感じていただければと思う。

「京都まち歩き」は、ずっと住み続けてきた地元を作品にすることで、どこに感動や、わくわく感を求めればいいのか少し迷った。結果、ぼくが大学生として暮らした1970年代後半の京都市左京区の散歩コースや、友人と歩き回った懐かしい場所をセレクトして改めて歩いてみた。言わば青春時代の昭和口マンかもしれない。

あわせて、最近訪れた無鄰菴と日常的に一人歩きしている北大路駅バスターミナルや、アトリエ付近の様子も作品にした。北大路駅には、音の見晴らしがよいポイントがある。その場所に立つとかなり遠くのエスカレーターのアナウンスや、足音などいろんな音が聞こえる。ということで「音の見晴らし」という色点字を入れた。

中屋敷さんと共通のテーマで制作した「ハッピーエンド」では、共感覚で作った「色点字」をたくさん使用している。文字列の意味は重要と考えて、ここに記すこととした。

幸せは、甘い

だけのチョコレート

だと、思ってたけど

いま、それはそこに

最後に描いた「光と風になる」は、木のイメージだ。木はさわっても全体はわからない。森に差し込んでくる光のぬくもりと風のそよぎで木のざわめきを感じる。そして、それらの環境を把握することが木そのものを認識する手立てとなっていることを表現したかった。

光島貴之／Takayuki MITSUSHIMA

1954 年京都府生まれ。10 歳頃に失明。大谷大学文学部哲学科を卒業後、鍼灸院開業。鍼灸を生業としながら、1992 年より粘土造形を、1995 年より製図用ラインテープとカッティングシートを用いた「さわる絵画」の制作を始める。' 98 アートパラリンピック長野、大賞・銀賞。近年は、連なって打ち込まれた釘の傾きや高低差により街の姿を表現したレリーフの組作品などを発表している。

企画者プロフィール

高内洋子（たかうち・ようこ）／Yoko TAKAUCHI

兵庫県生まれ、京都府在住。関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。博士（哲学）。重症心身障害児施設、グループホーム、ホームヘルパーなど障害のある人と関わる業務に携わりながら、2012年より全盲の美術家・光島貴之の専属アシスタントとして作品制作のサポートをおこなう。2020年より、アートギャラリー兼制作アトリエ「アトリエみつしま」マネージャーを兼任。施設運営管理および展覧会やワークショップなどの企画を担う。携わる主な企画として、展覧会「それはまなざしか」（2021年、アトリエみつしま Sawa-Tadori）、「まなざしの傍ら」（2023 年、同会場）、「今村遼佑 × 光島貴之感覚をめぐるリサーチ・プロジェクト〈感覚の点P〉展」（2025 年、東京都渋谷公園通りギャラリー）。ワークショップ「視覚に障害のある人・ミーツ・アート」（2021 年～）、「ぎゅぎゅっと対話鑑賞」（2023 年～）ほか。趣味は知恵の輪。

インタビュー



関連イベント情報

中屋敷智生 × 光島貴之 〈みるものたち〉の関連イベントとして、以下のイベントを開催。

※詳細は BUG のウェブサイトをご確認ください。

①トークイベント「世界を捉えることと描くことのあいだ」

中屋敷智生、光島貴之（本展出品アーティスト）、杉浦幸子（武蔵野美術大学・教授）、高内洋子（本展企画者）
6月14日（土）18 時～20 時



②対話型鑑賞

ファシリテーター：白鳥建二（全盲の美術鑑賞者／写真家）、光島貴之（本展出展アーティスト）
6 月 15 日（日）14 時～16 時

予約満席

③対話型鑑賞

ファシリテーター：光島貴之（本展出展アーティスト）
6 月 28 日（土）14 時～16 時

予約満席

アートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」選出企画

中屋敷智生 × 光島貴之 〈みるものたち〉

会期：2025年6月4日（水）－6月29日（日）

主催：BUG

企画：高内洋子

出展アーティスト：中屋敷智生、光島貴之

制作協力：アトリエみつしま、宮崎あかね、たけうちしんいち

アクセシビリティコーディネーター：鹿島萌子

運営：檜山真有（BUG）

制作：堀田ゆうか（BUG）

広報：野瀬明子（BUG）

広報デザイン：芝野健太

点訳：安達祐美子

翻訳：植田悠、キース・スペンサー、リリアン・キャンライト

会場・インタビュー撮影：片山達貴

設営：小滝タケル、砂田百合香（square4）、芦川瑞季、畑山樹、亀井友美